群教セ	G05 － 03
	令4.281集
	音楽－小

主体的・創造的に
音楽活動に取り組める児童の育成
――学びのつながりを実感できる音楽ノートの活用を通して――

特別研修員　大島　惠依子

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

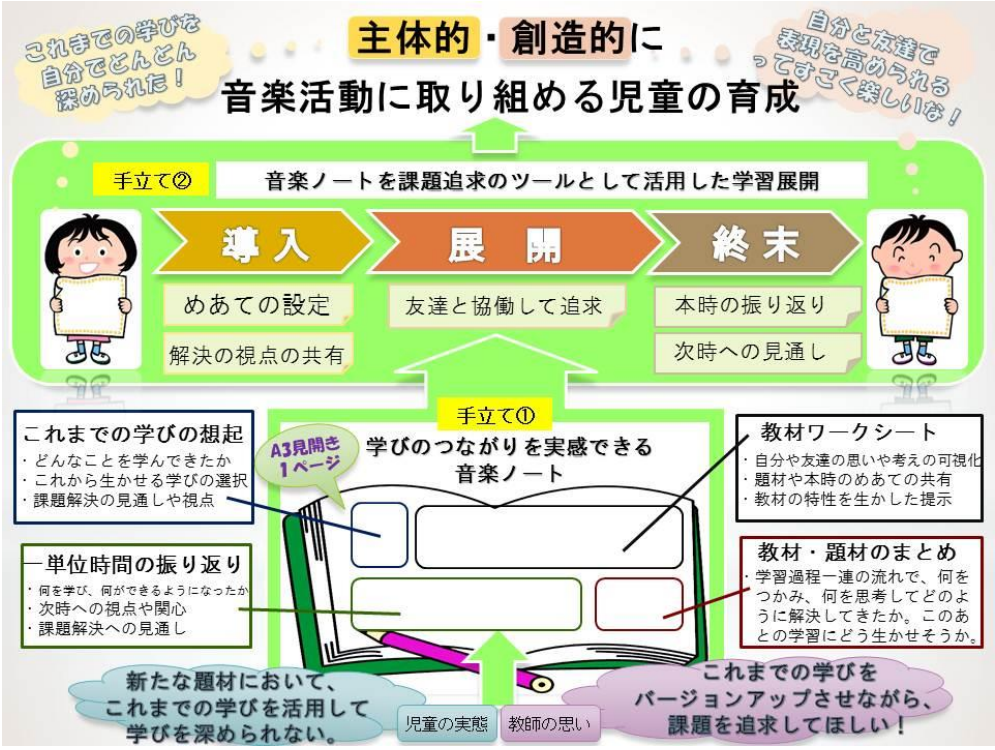
音楽科における目標に向かうには、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりするなど、幅広い音楽活動の中で学ぶ楽しさや意義を見いだすことが重要であることが小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編で述べられている。

研究協力校の児童は、これまで自分の思いや意図をもって表現したり音楽を味わって聴いたり、感受したことや自分の考えなどを言葉や音や音楽で伝え合ったりして学びを深めてきた。学習の振り返りの記述には、学びを自覚しているものや既習事項を生かして表現の追求をしてきたことを実感しているものもあり、これまでの学びを活用して表現及び鑑賞の活動を行ってきたことがうかがえる。しかし、一連の学びが一題材で終止してしまい、新たな題材において、これまでの学びを活用して考えを深めていく様子や記述が少ない。さらに、表現の工夫を追求する活動では、自分の思いや意図をもって工夫を考え、よりよい表現を目指して工夫を重ねられるが、考えが一定の形として表出できたことで満足してしまう児童も多い。それは、自分たちの表現が高まった喜びや自分たちで創り上げた実感を味わう経験の不足によるものだと考えられる。

児童がこれまでの学びをどのように活用していくかの見通しをもって新たな学びに向かったり、学びを活用しながら自分と友達で表現を創り上げた実感や喜びを味わったりできるよう、これまでの学びを基に新たな見通しをもてる音楽ノートを作成する。さらに、音楽ノートを課題追求のツールとして活用することにより、主体的・創造的に音楽に取り組める児童の育成を目指していく。

Ⅱ　研究内容

1　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

児童一人一人が主体的・創造的に音楽活動に取り組めるよう、以下の手立てを設定する。

手立て１　学びのつながりを実感できる音楽ノート

児童が新たな学習課題に向う際に、これまでの学びを想起したり、課題解決に向けた見通しや手掛かりを見いだしたりできる音楽ノートを導入する。①これまでの学びの想起②教材ワークシート③一単位時間ごとの振り返り④教材・題材のまとめの四つの主な役割を見開き１ページに収めることで、児童がいつでも学びを確認できるようにする。

手立て２　音楽ノートを課題解決のツールとして活用した学習展開

音楽ノートに記述された児童の振り返りを基にめあてを設定したり、児童の一単位時間ごとに変容していく思いや意図を基に課題解決の方法を見いださせたりして学習を進め、次時への見通しをもって振り返りができるよう、以下の場面で音楽ノートを活用する。

（導入の場面）めあての設定と課題解決の視点を共有する

（展開の場面）友達と協働して課題を追求する

（終末の場面）本時の振り返りと次時への見通しをもつ

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　見るもの、書くもの、視点にしたいものが一つのページに収まっていることで、学びを相互に確認しながら学習を進めることができていた。

○　過去のページをすぐに見返せるため、これまでの学びを想起できるポートフォリオとしての効果が高い。どの学習場面においても、その効果が発揮されていた。

○　展開の場面において、楽譜をよく観察し熟考する姿が見られた。音楽ノートの楽譜への書き込みや振り返りから、児童一人一人が自分の思いや意図をもって追求しているのかが分かった。

○　一単位時間ごとの振り返りを横並びにしたことで、思考の流れや変容を自ら確認でき、課題追求の見通しをもったり、工夫の視点を調整したりする姿につながっていた。

○　導入、展開、終末のすべての場面で、音楽ノートに書かれている児童の考えを取り上げて学習を展開したことで、児童の音楽ノートの必要感が増していた。

○　グループで追求する際、自分の音楽ノートを基に工夫の根拠を示したり、相手の工夫の根拠を探したりできていた。教材の特性に応じたワークシートが、細かく工夫を書き込む姿やそれをパートやグループで見合うなど活用する姿につながっていた。

２　課題

○　個々の音楽ノートへの記述がグループだけでなく、学級全体に広がるとさらに追求が深まった。それぞれの音楽ノートを見合い、考えを伝え合う時間を十分に確保できるとよかった。

○　課題追求の効果を上げるため、聴く視点を精選化させる必要があった。そのためには、生かしたい学びや工夫の視点を焦点化するとよかった。

○　これまでの学びを生かす必要感をより一層高めるために、児童自らが音楽ノートを開いてしまう仕掛け（教師の発問や学習展開）を更に工夫する必要があった。

実践例

１　題材名　　「曲想の変化を感じ取ろう」（第６学年・２学期）
　　教材名　　「ハンガリー舞曲第５番」（ブラームス作曲）
　　「風を切って」（土肥武　作詞/橋本祥路　作曲）

２　本題材について

この題材では、音楽を形づくっている要素やその働き、パートの役割などを手掛かりにして、作曲者の意図を考えたり曲に対する理解を深めたりしながら曲を聴いたり、表現の工夫をしたりすることをねらいとしている。

児童はこれまでに､音楽を形づくっている要素が様々に関わり合うことによってその楽曲独自の曲想が生まれ、それにより聴き手に与えられる様々なよさを味わってきた。さらに、前題材では楽器の構成によって生まれる曲想や、場面によって楽器構成を変えることで生まれる変化とそのよさについて主に扱い、曲想と楽器編成とその関わりについて思考を深めてきた。

本題材では、これまでの学びを土台として、楽曲の構成を考えたり曲想から情景・心情を想像させたりして、曲想と作り手が表したいものとそのための音楽的工夫のつながりの深さを体得できるようにする。さらに、演奏の仕方で違いを表出させられることや楽器にはそれぞれの役割があり、その役割によって工夫の度合いも変化することもあることをつかませていきたい。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	(1)　速度、強弱、音の重なり、変化や歌詞の内容などと曲想との関わりを理解するとともに、思いや意図に合った表現をするために必要な、音色や響きに気を付けて演奏する技能や、各声部の楽器の音や全体の響きを聴いて、音を合わせて演奏する技能を身に付ける。（知識及び技能） (2)　速度、強弱、反復や変化などと曲想の関わりを考え、曲想の移り変わりを味わいながら、どのように表現するかについて思いや意図をもったり、曲や演奏のよさを見いだしながら曲全体を味わって聴いたりする。（思考力・判断力・表現力） (3)　曲想の移り変わりと音楽を形づくっている要素との関わりに興味をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に器楽や鑑賞の学習に取り組み、様々な音の響きやその変化に親しむ。（学びに向かう力、人間性等）
評価規準	(1)　知識・技能 ①　曲想及びその変化と、速度、旋律の反復や変化、強弱との関わりについて理解している。 ②　曲想と音色、速度、旋律の特徴、音の重なりなどとの関わりについて理解している。 ③　思いや意図に合った表現をするために必要な、音色や響きに気を付けて演奏する技能や、各声部の楽器の音や全体の響きを聴いて音を合わせて演奏する技能を身に付けて演奏している。 (2)　思考・判断・表現 ①　速度、旋律の反復や変化、強弱を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、曲や演奏のよさを見いだし、曲全体を味わって聴いている。 ②　音色、強弱、音の重なりを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、曲の特徴にふさわしい表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもっている。 (3)　主体的に学習に取り組む態度 ①　曲想の移り変わりと音楽を形づくっている要素との関わりに興味をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に器楽や鑑賞の学習に取り組もうとしている。

過程	時間	主な学習活動
つかむ	第 1･2 時	・鑑賞曲「ハンガリー舞曲第５番」をもとに、作曲家としての工夫と演奏者としての工夫の２つの視点から学習課題をつかむ。
追求する	第３時	・器楽曲「風を切って」を聴き、楽曲の理解をすると共にどのような演奏を目指し、どのように工夫を追求するかについて、これまでの学習を基に見通しをもつ。
	第４時	・曲想と音色、旋律の特徴、音の重なりなどとの関わりから、イの場面についてどのような演奏にするかについて、思いや意図を伝え合い、表現の工夫を友達と共有したり評価し合ったりしながら追求する。
	第５時	・曲想と音色、旋律の特徴、音の重なりなどとの関わりから、ウの場面についてどのような演奏にするかについて、思いや意図を伝え合い、表現の工夫を友達と共有したり評価し合ったりしながら追求する。
まとめる	第６時	・曲全体を通したとき、工夫が効果的であるか、楽曲にまとまりが生まれているのかを視点に全体で確かめ合って演奏する。 ・題材での学びを振り返り、曲想の変化によるよさやそれを生かすコツをまとめる。

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全６時間計画の第５時に当たる。本時のねらいは、表現の工夫を追求する場面において、曲想の変化と旋律の動きやパートの役割との関わりを視点に、思いや意図を膨らませながら表現の工夫を追求することである。ねらいを達成するための手立ては以下のとおりである。

手立て１　学びのつながりを実感できる音楽ノート

児童一人一人が課題解決の手掛かりとして、これまで身に付けてきた知識・技能を振り返ったり、これまでの学びをどのように活用していくかの見通しをもったりできるよう、自分や友達の工夫の視

点を音楽ノートに記入させていく。

音楽ノートには、①これまでの学びの想起 ②教材（楽譜）③一単位時間の振り返り ④教材・題材のまとめ の役割をA3見開き１ページに収めたものとし、これまで自分が何を学んできたのか、新たに学んだことは何か、これからは何を視点に課題を追求するのか等、一連の学びの過程を確認して学習を進められるようにした。

図１　音楽ノートの１ページ

本題材「曲想の変化を感じ取ろう」は、４年生時から系統的に学びを深めてきた題材であるため、同じ題材名で学んだ内容を想起できるよう、過去の音楽ノートや教具を基にして、これまで身に付けてきた知識・技能をどう生かしていきたいか自己決定して追求への見通しをもてるようにした（図1-①）。本時で扱う器楽教材「風を切って」は、大きく分けて二つの場面から構成されているため、楽譜を上下に分けたものにすることで、曲想の変化に加え、旋律の動きや音の重なり方に思考が向くようにした（図1-②）。また、一単位時間毎の振り返りと教材・題材の振り返りの記述欄を設け、学びの過程を確認するだけでなく、学習の深まりを実感できるようにした（図1-③）。さらに、児童の思いが全ての学習活動の基盤となるよう、初発の思いを記入する欄を設け、どの学習過程においても確認できるようにした（図1-左上）。

手立て２　音楽ノートを課題解決のツールとして活用した学習展開

音楽ノートに書かれているこれまでの振り返りを基にめあてを設定したり、課題解決に向けた協働学習の際には音楽ノートを基に意見交流を行わせたりして、工夫の視点の焦点化を図るためのツールとして扱っていく。終末の場面では、これまでの学びと新しい学び、これからの学びを照らし合わせながら振り返りを記入させることで、見通しをもって次時に向えるようにする。

４　授業の実際

導入の場面：前時までの学習を振り返り、本時のめあてを設定する

前時までの振り返りを読み、どのような視点で課題の追求を行ってきたのか確認させた。その後、全体で共有し、「聴き手に伝わるように演奏したい」という思いや意図を基にめあてを設定した（図２）。「作詞者の意図を考える」「パートの役割に合った音を出す」など、友達の考えを音楽ノートにメモしながら、新たな気付きを基に学習を調整しようとする様子が見られた。

図２　導入場面

展開の場面：課題を追求する

個で音楽ノートに工夫を書き込みながら実際の演奏で試したり、音楽ノートに蓄積された学びを提示しながらパートで工夫を伝え合ったりして課題追求に向かった（図３）。その後、グループになり、互いの工夫点を共有して評価し合った。その際、自分の音楽ノートと照らし合わせて発表を聴いたり評価したりしていた（図４）。

図３　パートの交流

図４　グループ交流

グループで合奏し表現の工夫を確かめてみると、考えた工夫が実際の演奏に表出できていないことに気付いたため、「変化を生むためには、前に学んだ“強弱をそろえる”ことが大事じゃないのかな」と、強弱の効果について学んだ際の音楽ノートを見返して確かめていた。「全部のパートがそろう少し前のタイミングで一緒に強弱を付けてみよう」など、これまでの学びをつなげながら、解決のツールとして活用する姿が見られた（図５）。

図５　再追求の場面

終末の場面：学習のまとめ・振り返りをする

グループの工夫点を伝え合い、お互いの演奏を聴き合ったところ、「強弱の変化」について課題点が挙がった。課題を解決するにはどうしたらよいか発問したところ、児童から「腕のふり幅」「息づかい」「共に」という技能に関わる言葉が出された。そのため、それらの学びをつかんだ際の音楽ノート（過去のページ）を読ませ、実感を伴った理解を促した。

その後、課題を解決するために挙がった視点を意識して全体で合奏させることで、表現の高まりを実感できるようにした。しかし、思うように強弱の変化を表現できなかった。そこで、これまで学んできたことに加え、「楽器の特徴を生かして共に盛り上げること」が必要となることに気付かせ学習のまとめを行った。

図６　言葉による振り返り

振り返りでは、「強弱をみんなでそろえていくことが大切。パートだけでなく、グループ全体で盛り上げて演奏したい」など、新しい学びとこれまでの学習を結び付けながら、自分の思いや意図を書き込んでいた。記入できた児童から、各々声に出して読み、新しい学びを取り入れた演奏を個々で試させていった（図６）。最後に、振り返りを基に学びを調整できるよう、全員で演奏による振り返りを行った（図７）。

図７　演奏による振り返り

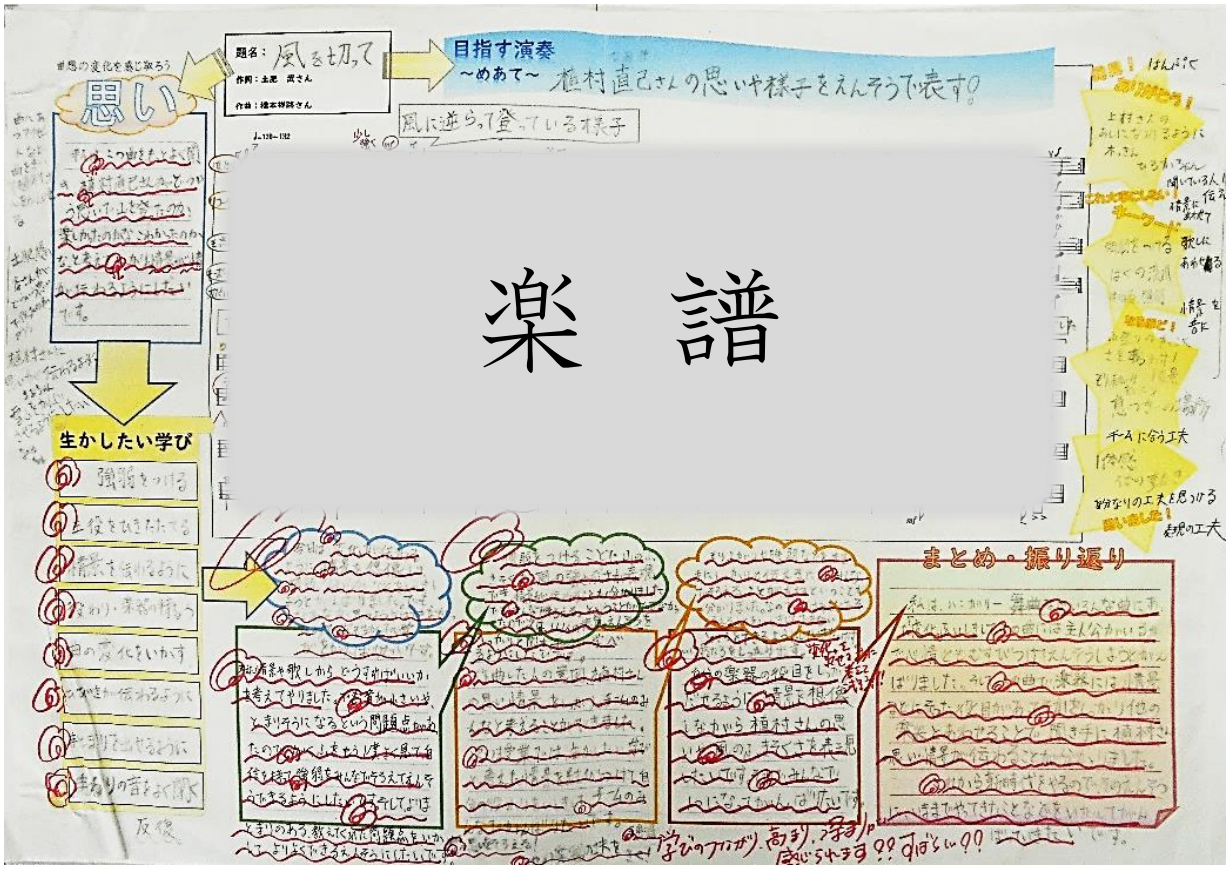
５　考察

児童が新たな課題に向う際、これまで身に付けてきた知識・技能を想起したり解決に向けた見通しを見いだしたりできる音楽ノートにするため、課題解決に向けて生かしたい学びを記入させた。それにより、一単位ごとの追求の場面において、解決の視点としてそれらの学びを挙げた児童が多くいた。それは、解決に向けて必要となる工夫の視点をこれまで身に付けてきた知識・技能から自分で抽出できたことによる効果である。さらに、それを本時の工夫の視点に挙げていた児童が多く、これまでの学びが生かされて学習を深めている実感につながっていた。教材ワークシートには、本題材の目標に沿って楽譜を編集して載せたことで、児童は曲想が大きく変化する場面や、作り手の意図を旋律の動きとパートの役割から考えることができ、どのような演奏を目指すかについて自分の思いや意図をもつことができた。

さらに本研究では、音楽ノートを学習活動に位置付けて活用させた。導入場面では、児童の振り返りを基に本時の学習課題を設定したり、課題解決に向けた視点を定めたりした。児童の考えを基に課題を設定することで、なぜ課題を解決するのか、そのためにどうしていくべきなのか、学ぶ意図を明確にして自らの視点を設定する姿につながっていた。展開の場面では、音楽ノートに記入してきた工夫を根拠として自分の考えた工夫を各々が発表することができていた。また、友達の考えや工夫を自分の音楽ノートを見ながら聞く姿が見られ、自分の考えや工夫と比較して思考する様子が見られた。そこでは、自分と友達のパートの動きを基に工夫を確認していたため、本時のめあてを達成するためのポイントである「共に工夫を合わせて演奏する」ことに気付かせることができた。終末の場面では、音楽ノートの一単位時間ごとの振り返りを記入した。そこには、これまでの学びと本時の学びを比較したり新しい気付きや学びを振り返ったりした言葉が書かれていた。その記述から、課題解決に向けて自分がどのような思いや意図で追求してきたか思考の流れを把握したり、新しい学びや協働学習によって深まった考え等を加えたりしてきたことが、自己の学びを振り返りながら新たな自己課題を明らかする姿や、めあてに即して調整的に追求する姿につながったことがうかがえた。

以上のように、児童の演奏や活動の様子及びノートの記述から、児童がこれまで何を学んだのかどの学びを活用していくかの見通しをもって新たな学びに向かったり、学びを活用しながら自分と友達で表現を創り上げた実感や喜びを味わったりするために、学びのつながりを実感できる音楽ノートの導入と音楽ノートを活用した学習展開の充実が、主体的・創造的に音楽に取り組める児童の姿につながったと考える。

６　資料



実際の児童の音楽ノート